

晩夏期に多発したリンゴ炭疽病



葉に生じた不整形の病斑



果実での初期病斑（矢印）



罹病果は激しく腐敗する



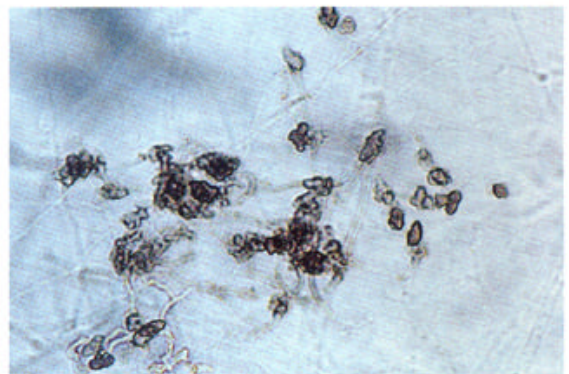
先端葉を残し、激しく落葉する



激発状況でも果実の大半は落果しない



病原菌の分生胞子



病原菌の付着器

< 晩夏期に多発したリンゴ炭疽病 >

病原菌：Colletotrichum gloeosporioides (Penzig) Penzig et Saccardo

1. 発生の経過

1998年9月上旬、南多摩の山間地で栽培されているリンゴに、激しい落葉と果実腐敗を生じる病害が多発した。当年は春期～梅雨期にかけて長雨が続き、その後気温が上昇しても多雨、曇天傾向が継続した。

2. 病徴

激発圃場では、ほとんどの葉が落葉し、わずかに残った先端葉にも褐色～暗褐色、不整形の病斑が多数生じていた。果実は大半が落下せず、枝に着生したままであった。

果実病斑部には多数の褐色小粒上に鮭肉色の分生子粘塊が生じていた。葉には明瞭な菌体は認められなかったが、温室に保持すると2日前後で果実と同様の菌体が形成された。

わが国のリンゴでは、炭疽病による落葉症状についての明確な記録はないが、分離菌株の接種により病徴が再現され、分離菌はColletotrichum gloeosporioides と同定されたことから、1998年に発生したリンゴの激しい落葉は炭疽病の一症状であることが明らかとなった。